

大ならしむべくともまでも生を緊張し、そして繼續して行きたい。

——勅語煥發三十年記念日の夜(九・一〇・三〇)——

ポプラ樹陰の獨語

四年 鈴木安藏

澎湃たる太平洋の波くだくる原釜灣頭、永劫より永劫へ清さを盡して流るゝ宇多川の畔、そこに育まれたる相中辯論部の一員として、私は本日思ひ出深き此壇上に立つて「ポプラ樹陰の獨語」を齎らし得ることを痛切に光榮と感ずるのであります。私の演題は掲げられてあります通り「ポプラ樹陰の獨語」とかう申すんであります。一寸お分り惜い演題でありますから、一應説明申し上げて、それから本論に移らうと思ふのであります。

私共の學んで居ります相馬中學校庭に高く聳え立つて居る一本のポプラの木があるのであります。御承知の通り元來ポプラと申します木は眞直に成長する木でありましてその青々とした葉をつけて雲を拂ふかと思はれる様に聳え立つた姿は見るからに大變心地良いものであります。私達はこのポプラを我々アムビションと躍る相中健兒のシムボルであるとかう見なして居るのであります。殊に此頃晩秋の澄み切つた而も何處

となく愁を含んだ空合の中に只一本高く聳え立つて秋風のまに／＼黄ばんだ葉を散りしいて居るこのポプラを見まする時さなきだに若い血汐に躍る私達の胸は一種異様の懐かしさに高鳴るのであります。私はこの校庭のポプラの木が大好きなであります。で私は何時も其樹蔭に立つて思ひの儘深い瞑想に耽けるのを常として居るんであります。

「ポプラ樹蔭の獨語」とかう申しますのは纏て私が大好きなこの校庭のポプラ樹蔭に佇んで思ふ存分に耽つた瞑想の一端をお話し仕様否聽いて戴かうとかう云ふ譯になるんであります。諸君追憶は限り無き慰さめであるときがあります。さらば私は追憶の駒にむち打ちながら思ふ儘に思索の道を歩んで見ようと思ふのであります。丁度或る秋の黄昏時でありました。私は亡んで行く様な寂しきを見せて山の陰に沈まうとする夕月に照らされながら絶えきれぬ哀愁を胸に抱いてさゝやかなる谷間の流れに沿うてあても無く徨ふのでした。

この閑空の黄昏に一体お前は何處へ行くんだ。私は自分を尋ねましたけれども夫れは「わからん」と情け無い返事でした。何時しか私は谷一つ越して廣い田畑に望んだ小高い丘の一隅に佇んで居るのでした。釣瓶落しの秋の日は静かに暮れなんとして野も田も畑も一面に凡てはほの暗い夕闇に包まれました。呪ふ様な鳥の輓歌に相和して若い農夫の麥蒔き唄は閑寂の暮を透して幾重の裏悲しいリズムを傳へるのでした。黒々とすき返された畑の面をなでる様に吹いて來る秋の夕風は物言はずとも唇寒く木々の落葉を誘ふのでした。

農夫達は堪へ切れぬ喜を胸にして黒い土を振り返りながら各々家路を辿るのであります。「吁凡ては静寂だすべては平和だ」とかう私の心はつぶやきながら何時しか遠い海を越えて、フランスの天才畫家ミレーの

書いた「夕の鐘」を思え浮べるのでした。諸君の中には屹度ミレーの書いたあの「夕の鐘」と云ふ名畫を御覽になつた方があるんでせう。

凡てを蔽はんとする夕闇の中に一日の勞作を終へて若い農夫の夫婦がショベルとバスケットを前に置きはるか遠くカトリックの教會から響いて來る鐘の音を聞きながら静かに夕の祈を神に捧げて居る。あゝ静寂の凡て。天には榮光地には平和。これが「夕の鐘」の表はして居るすべであります。

自分がかうしたきよい「夕の鐘」の畫を思ひ浮べまして今更ながらフランスの片田舎バルビゾンの森蔭に寂しい孤獨の生涯を終へた天才畫家ミレーを憶はざるを得なかつたのであります。ミレーの生涯を靜かに考へて見まするのに彼は確かにひとりぼつちの淋しさを否喜びをしみじみと感じた人であつたと思ふのであります。ミレーの師ラングロイスが彼の天才に驚歎して彼を巴里の都に學ばしめた時、師の好意を心から感謝したものの、孤獨裡の喜びを慕ふミレーは一刻も早く賑はしい趣味な都から逃れ出でて自然に取り巻かれた静寂の生活を送り度いとかう希がつたのでした。綠濃きバルビゾンの森蔭、街のさんざめきも聞えず、訪れる人もなき孤獨の森林生活、そこにミレーの天才は育まれたのであります。彼の作品「種蒔」や「夕の鐘」にあらはれた幽雅なしかも力強い彼の天才は實にこの孤獨の世界にあつて悠久なる自然に一致し得たが爲めに生れ出でたのであります。

あゝ孤獨のミレー自分はかう叫んで心からミレーの淋しい然も力強い孤獨の生活を慕はずには居られなかつたのであります。もう四邊は暗と沈黙の世界でありました。空には多くの星が輝き謎を紫に瞬して居りました。私はこうした追想裡にやみの家路を辿つたのでした。諸君それ以來あの黄ばんだ校庭のポプラの木

蔭に立つて私は深い瞑想裏に孤獨の喜を憧憬するのであります。

私は本日からしたポプラの樹蔭の瞑想を繰返してそして皆さんと共に孤獨に徹した強者の生活に付いて今少し考へて見度いのであります。シヨベンハウエルとかう申しあげますと諸君は屹度人生を悲觀せる哲學者なりとお考へなさるんでありませう尤も彼が最後にたどり付いた結論は矢張り悲觀的哲學であつたさうであります。けれども彼れがこの結論に到着するまでに努力した彼れの勇猛心は又實に強者の生活を思はせるに充分なものであります。

私は出来る事ならば此處でシヨベンハウエルの生活を細かに追想して皆さんと一緒に如何に彼が孤獨裡にあつて深刻なる苦惱に泣いたか彼れが最後に彼れの哲學的見解に悲觀説の斷案を下すまでに、どれ程努力したかと、之等の事を考へて見度いのでありますが、時間の餘裕ありませんから、單に彼れがラヴァーテルの書いた一枚の寓意畫に付て述べた一説をお話して、彼れが力強い叫の一端を知るに止めて置かうと思ふのであります。ラヴァーテルの書いた寓意畫と申しますは至つてシンプルな意匠でありまして、即ちその繪は燈火を捧げて居る手を鋭い針を以て居る一匹の蜂がしたたか刺して居るそしてその燈火の焰には蚊が群れ集つてその羽や頭蓋をこがして居ると云ふ意匠なものであります。

それはよしや蚊が襲ひ來り如何に其身を焦がし光を妨げやうとも光は毫も消えはしない蜂が如何に劇しく刺さうと我々は決して此燈火を放さないとかう云ふ力強い意味を寓して居るんださうであります。シヨベンハウエルは即ちこの寓意畫に就いて「これこそ孤獨裏にあつて真理のために戦ふ人生の強者に取つて心強い感じを與へるものである」と絶叫して私達に強く何者かを暗示して居るんであります。私はこんな事を思

ひ浮べる毎に遙か獨逸のライン河のほとりフランクフルトの北方に眠れる大哲人の淋しい而も力強い孤獨の生活を慕はずには居られないであります。

諸君——私はもう一步進んで遠い二千年の昔人類の憂を説いたナザレの聖者イエスキリストに就いて考へて見度いのであります。私は基督教信者ではありません。でないばかりでなくキリストが言つた『汝祈る時に偽善者の如くする勿れ彼れ等は人に見られんが爲に會堂の隅に立ちて祈る事を好む吾誠に爾等に告げん彼等はすべてにその報を得たり』とかう云ふお言葉にそむいて殊更に人の前や教會の中では涙を流したり聲を張り上げたりして信仰の有難さを説いたり高振つて説教をしたりして蔭に廻つて非道徳な破廉恥を敢てする様なさもしい人々の多い今のクリスト教徒には寧ろ反感を抱いて居る一人であります。

けれども私はあの一人ぼつちのイエスを考へます毎に限りないあこがれを感じるものであります。諸君——『空の鳥には巢がある地には穴がある然し私には枕する所がないんだ』とかう言ひなすつた聖者イエスは確かに孤獨の人であつたと思ふんであります。

橄欖山の朝あの罪の女を許したエスベタニカの村でラザロの墓に泣いたイエス、諸君獨りぼつちだと云ふ事を泌々感じたエスにして始めてあの大きな御教深い思ひやりは生れて來たのではないでせうか孤獨に徹してこそあの博愛の御教は生れて來たのではないでせうか。諸君更にガンジス河水清澈たる邊りは天上天下唯我獨尊と叫んで衆生濟度の大義を叫んだあの釋迦尊も孤獨に徹した人ではなかつたでせうか。吁孤獨の溫者よ、私はかく考へます時無限のあこがれを感じるのであります。私は又常にかう云ふ歌を愛誦して居ります。

人間の使はぬ言葉ひよつとして

我のみ知れる如く思ふ日。

死にたくてならぬときありはばかりに

人目をさけて怖き顔する

これこそ明治文學の一方に物凄い天才の光を放ちながら廿七年の短い生涯を終つた石川啄木氏の歌であります。

あゝ何と云ふ自由な力強い感激でせう諸君！啄木は償はれざる現世に於て朝露の如く散り果てた薄命の詩人でありました。けれども彼の詩集はこの歌あるを見出す時彼啄木は孤獨に徹した喜びの人であつた事を雄辯に教へらるゝではありませんか。

又私は嘗て逝ける近代の文士國木田獨歩氏の告白としてこんな言葉をきいた事があります。

「如何に吾等の生活は寂しくとも真にその意味を知り情味を感じ得るならば誠に幸福ではないか。諸君之れ孤獨に徹したる人にして始めて言ひ得る言葉ではありませんか。そこには正しく孤獨の權威が認めらるゝではありませんか。

諸君ミレーと云いシヨベンハウエルといひクリストといひ釋迦尊といひ或は又啄木といひ獨歩といひみんな吾々の上に力強い何物かを與へてくれた人々であります。而も彼等は寂しい孤獨の中にあつて自己の存在を靈覺し而して不朽の生命に生きた人々であります。吁孤獨よそこに無限の力はある至上の喜はあると私は大きな聲で云ひたいのであります。

諸君私は更に一步進んで然らば孤獨とはそも何であるか、孤獨の喜びとは果して何であるか、この問題に就いて考究して見たいのであります。孤獨とかう申し上げてもそれは決して浮世離れの瞑想や支那の七賢人の竹林生活を意味するのではないのであります。單に孤獨とこれ丈申しますと皆さんの中には「世の中が皆濁つて居るそして自分ばかり清いんだ」とかう嘆いて汨羅の淵に身を投じた支那の屈原や或は又「我周の粟を不食」と叫んで首陽の山にかくれて仕舞つた伯夷叔齊たちの様な心境を思ひ浮べなされる方もお有りなされるのであります。

けれども私が憧憬し高唱する孤獨と申しますのは、そんな意氣地のない卑怯な心境を申すではないのであります。それでは何んだ。一言にして云ひつくしますならば孤獨とは内なる生命のあくみであると申したいのであります。極言しますならば孤獨とは自己を透視するための瞑想である。我の存在を靈覺せんがための更に神の御力宇宙の實在を認識せんがための内なる世界の覺醒であるとかう信するのであります。孤獨に徹する。それは即ち永遠なる生命の伸展の第一歩であり、真に偉大なる目的に進む峻しい旅程であります。

即ち吾人が孤獨に徹する時真に思想に生き藝術に生き宗教に生き科學に生き哲學に生き而して政治に生きる事が出来、その他あらゆる方面に我の眞生命の開展を見る事が出来るのであります。と同時に永世不滅の大宇宙の精靈に融合する事も出来るのであります。即ち徹底したる孤獨生活をここに眞の幸福があり大なる喜びがあると信するのであります。

之を更に側面から觀察しますならば皮肉な言い方ではありますけれども、厨川白村が『象牙の塔を出て』と申して居ります所謂大馬鹿者の生活は纏て私の高唱致しまする孤獨生活を意味するものであります。

「馬鹿者とは何ぞ」之が大問題であります。馬鹿者にも随分種々ある「馬鹿と缺は使ひ様」こんな類の馬鹿もありません。朝起きて飯を食つて晝間遊んで夜ねる藝無しの馬鹿もあります。又家財道具を質において遊び事に夢中になる馬鹿息子もあります。年が年中子を忘れる親馬鹿といふ馬鹿もあります。馬鹿も無数ある。兎に角白村氏の大馬鹿者はこんな類でないであります。一言にして言へば利害の打算を足跡にかけて偽らざる自己の中心によつて動く人即ち妥協したり胡麻化したりして濟ませぬ人、本質的に徹底的に第一義的に物を考へてそれを生活に實現し得る人、炎々として焼ゆる烈火の如き内部生命の焰に何時も新しい薪を加へて自我の充實を怠らない人、これを白村氏は大馬鹿者とかう申して居るんであります。

この大馬鹿の生活を割引なしに持つて來てあてはめたのが私の申します孤獨に徹した強者の生活なんであります。此意味に於て大小の區別こそあれ、釋迦も基督もトルストイもカントもニイチエもルーテルもミレも、乃至はラツセルもマルクスも或は啄木も獨歩もみんな今申し上げました馬鹿者の仲間であります。

この馬鹿者があればこそ、はじめて人類の創造的進化があり社會の徹底的改造が生ずるのであるとかう信ずるのであります。

諸君私は偶感的に孤獨生活の權威に就いて論じて參りました。もう終りを急がねばなりません。今少し許して戴いて極簡單に結末を告げたいと思ふのであります。

私が先月の事でありました「今度十八日に福島の公會堂で孤獨生活に就いてこれ／＼の事をしやべつて見様と思ふんです」とかう伯父に話しました。處が伯父は大變感慨深さうな様子をして申しますには「その孤獨の生活に就いて思ひ出したが自分のまだ學校時代の頃ある氣まぐれの友人が在つた」とかかう前提してこ

な話をして呉れたのであります。

その氣まぐれの友人と申しますのは極端な自然主義かぶれの男だつたそうであります。「僕は何時も思ふんだ。畢竟偉人と云ふのも天才と云ふのも下らないでないか。シーザーと云つてもナポレオンと云つても單に吾々が彼等の名を知つて居るだけじゃないか。歐洲征服も統一も何の生命があるんだらう。カントの智識もゲーテの詩も要するに遊戯だ。此地球と星でも月でも一度カチンとうち合つた時人間不朽の眞理や美術が何になる。我々だつてさうぢやないか。英語や數學を勉強して何になるんだ勉強—秀才—試験—卒業—社會—位置—月給—女—子供—そうしてやがては死—葬式—寂しい墓—之が吾々のすべてじゃないか。僕には理想もなければ勿論信仰なんぞあつて堪まるものか。」とこんな事を言つて彼は肉体的享樂をモットーとするライフに耽溺して居つたそうであります。けれども人間のどこかにひそんで居る至純性はかうした無自覺な彼の心靈をもやがて呼びさますにはおかなかつたんでせう。彼は後になつて孤獨裡に自己半生の懺悔でもやるつもりなのか或るさゝやかな山寺に隱遁生活を送つたそうであります。そうして時々舊友の顔さへ見るとこんな魂の入れ代つた言葉を口癖としたそうであります。「兎に角一步一步の踏つけて行く様な生活を送る事はどんなに嬉れしい事だらう。ニイチエも云つて居る、汝は生きねばならぬ。汝の生て居る事は喜びである。吾々の希望もニイチエの所謂生きる事は喜びである。といふ點に一致せねばならぬ。何處までも吾々は確實な存在を有する生命に生きねばならぬと云ふ事を、孤獨の生活から泌々と教へられた。」と。

諸君、之れはほんの座談に過ぎないんですけれども私はなか／＼含蓄のある談だと、大變面白く聞いたんであります。即ちそれはほんとうに自分を認め自己の存在を認識する孤獨の生活の喜を雄辯に物談つて居る

んだと、かう思ひまして孤獨生活を高唱する私に取つては大變愉快に感じたのであります。

あんまり皆様がお静に聞いて下さいますので興に乗じておしやべり致しました。何だか纏まらぬ話でありましたが要するに本日私は孤獨は喜びなり。力也。これ丈のことを皆様に申し上げたに外ならないのであります。諸君滔々として時代推移の流は常に變轉して居ります。過去を忘れ未來を思はず現實にのみ執着せる現代人の力なきさゝやき。即ち金力權勢、酒、女、精神文明の建設を忘れたる現代人の空しき誇り科學物質あゝ私は聞くに堪えずして不肖ながら先覺の鐘を叩かんとして敢て此の演壇に立つたのであります。吁孤獨に徹せよ。之れ吾人の力ある叫であらねばならぬ。噫滿堂の若き人々よ御身の胸に高鳴る血の囁きはなんであるか。これ皆死のゴールに急ぎつゝある進行のマーチではないか。吾人の生涯は宜しく孤獨に徹せねばならぬ。諸君トリトンの笛の音が月影ゆかしきエーゲ海に響きし如く私をして最後の一言を語らしめ給へ。吁孤獨よそこに無限の喜びがある。そこに無限の力がある。

最後に諸君の御静聽を感謝してお別れする次第であります。